北の縄文文化回廊
に向けたクラブ活動

北の縄文CLUB
HOKKAIDO
MINAMIKAYABE

通　信

第　10　号

勾　玉　づ　く　り

目　次

1．はじめに　・・・2
2．平成19年度　活動内容　・・・2
3．各活動内容　・・・2～6
4．会員からの投稿　・・・6～7
5．縄文人に学ぶ　・・・8

1．はじめに

19年度は北の縄文ＣＬＵＢの創立10年という節目に当たる年でしたが、このうえないビッグで記念すべき年になりました。

「中空土偶（カックウ）」が北海道初の国宝に指定された６月に続いて、史跡大船遺跡の復元整備事業が９月に開始されました。また、将来に向けた動きも活発で縄文文化交流センターが平成22年10月開館の予定で建設業者の選定が実施されました。

さらに、「北海道、北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録の第一歩、暫定リストの提案が12月にされました。北の縄文ＣＬＵＢの活動を「続けてきてよかったな」とつくづく思います。国宝「土偶」に関連したイベントも多く、忙しいなかにも、喜びの多い年でした。国宝「土偶」から元気をもらって、次の10年に向けた活動にますますはずみがつくものと確信します。以下、19年度の活動内容を報告します。

2．平成19年度　活動内容

活　動　日	主　な　活　動	参加人数	活動場所
５月26日	第10回「北の縄文ＣＬＵＢ」総会	20人	南茅部公民館
６月16日	自主研修（大船遺跡周辺清掃） と自然観察会	5人	大船遺跡
７月28日	勾玉づくり（荒天中止）		南茅部公民館
９月８日	ＮＰＯ法人函館市埋蔵文化財事業団主催 2007縄文の道フォーラム後援 ワークショップ協力　～土偶作り～	30人	南茅部公民館
11月17日	縄文の糸づくり	13人	南茅部公民館
１月26日	アンギン編み・勾玉づくり	20人	南茅部公民館
２月２日	キャンドルdeナイト	50人	南茅部公民館

（関連活動）

６月３日	国宝「中空土偶」展示に伴い活動の紹介	南茅部町民の庭
７月21日	国宝「土偶」学習会	大船展示館
９月２日	土偶作り研修	函館市埋蔵文化財事業団
９月24日	土器づくり	南茅部公民館
９月24日	国宝「土偶」学習会	南茅部公民館
10月13日	野焼き	大船遺跡
10月14日	アカソ・イラクサ刈り	臼尻町垣の島遺跡周辺
10月20日	国宝「土偶」学習会	南茅部公民館
１月19日	国宝「土偶」学習会	南茅部公民館
１月12日・19日	キャンドル作り	南茅部公民館

3．活動内容

（1）自主研修（大船遺跡周辺の清掃活動）と自然観察会

6月16日(土)朝10時大船遺跡展示館前集合、日差しが眩しい天候に恵まれました。4月1日から開館した国史跡大船遺跡の展示館や公開された、竪穴住居跡を見学に訪れる人も新緑に誘われて日々多くなってきています。会長の挨拶から始まり今年最初の活動である、公開されている住居跡に続く小道の草刈と遺跡内のごみ拾いを行いました。少し動いただけなのに、額には汗がながれおち、世間話に花を咲かせながら草を刈っていきます。運動不足もたたったのか腰も痛くなりました。なぜかおばあさんになったような、なーんてジョークも交えながら笑い声も弾みました。午後からは樹木医である斉藤嘉次雄先生を講師としてお招きし、大船遺跡の裏山へ足を運び、樹木と草花を

会長の挨拶

ああ‥腰がいたいね

観察しました。樹木には栗の木や鬼グルミ、山ウルシ、キハダ、ハナイカダ等、草花にはヤグルマソウ、アカソ、アマニュウ、エゾニュウ、アスパラガスに似た風味で美味なシオデ、林の中に入ると群生しているミズ（ウワバミ草）を発見、私達は一目散でその場所へ走り寄り、今晩の宴会の肴

ああ…なるほど

考えこむ斉藤先生

ハナイカダ

にしようと採りました。どのように料理しようかと考えていたら、先生が「ここでみんなで皮をむこう、そうすれば早い」と皮のむき方を教えてくれました。

そこへ展示館を訪れた中年の女性が、「わあ懐かしい」と言って一緒に参加され、「昔こうやって私たちも食べたんだよね」って懐かしんでいました。ちなみにそのミズは塩と昆布だしで即席のお漬物にしていただきました。

（2）土器作りと野焼き（大船遺跡復元整備事業　協力）

函館市教育委員会生涯学習部より「史跡大船遺跡復元整備」の協力依頼が９月８日にありました。複製展示用の土器を作り、10月13日野焼きをして完成させました。

出きばえはどうかしら

乾燥した土器

野焼きの様子

（3）縄文の糸づくり

11月17日（土）に行われた糸づくりには、遠くは旭川から参加された方も含み13名で実施しました。糸づくりには、北海道でも自生しているアカソ、ミヤマイラクサという植物を使います。アカソやイラクサは一ヶ月前に刈り取って乾燥させたものを用います。まずアカソを束ねて丸太を台にした上におき、根気よく１時間ほど木槌で叩いていくと木質と繊維に分かれてきれいな繊維を取り出すことが出来ます。その後に糸を紡いでいきます。

刈り取り作業

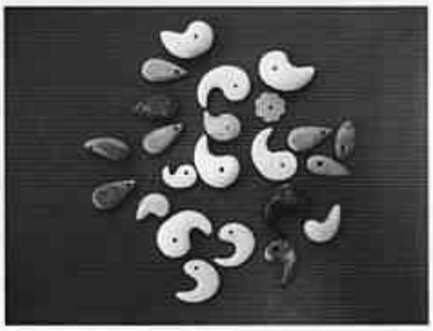
イラクサを叩きます

アカソの繊維

（4）アンギン編み・勾玉づくり

１月26日、南茅部公民館でアンギン編みと勾玉づくりを行いました。アンギン編みの材料には市販の糸や採取したススキの茎を使い、作品にはコースターや30cm四方の大きさの簾など、思い思いの作品ができあがりました。勾玉づくりでは滑石を使い、ピンク・ブラック・グレー等の色々な大きさの勾玉の他にペンダントも作りました。

アンギンを編む


勾玉製品

（5）キャンドルdeナイト2008（シーニックバイウエイ北海道函館・大沼・噴火湾ルート）

２月２日(土)午後５時から７時まで南茅部公民館周辺を「キャンドルdeナイト」事業に協賛し、約200個のキャンドルのあかりで道を照らし楽しんでいただきました。これは今年で２回目を迎え、参加活動団体同士の更なる連携と一般の方々も参加できる仕組みづくりを目的に実施したものです。当クラブでは２ヶ月も前から事前準備をし、すべてが手作業の為、ロウをとかして牛乳パックを型わくにした、手作りのキャンドルを200個作るのはたいへんでしたが、できばえは満足しました。日が沈む頃キャンドルの設置が始まり、辺りが暗くなるにつれ灯りがとても幻想的でした。当日は中空土偶の雪像も作られ、キャンドルのあかりで浮かび上がり素晴らしい「キャンドルdeナイト」でした。来年度以降も続けたいとの声があがっていました。

美しく輝くキャンドル

カックウの出来栄えはいかが

（6）研修活動　国宝「中空土偶」の学習会について

平成19年６月８日、著保内野遺跡（函館市南茅部地域）出土の中空土偶が国宝に指定されました。この土偶は、その写実的な表現、精巧な造形、高い装飾性から、これまで国内外から高い関心・注目を集めてきましたが、これを機会にこの地域で縄文をテーマに活動を続ける私達自身が、この土偶について様々な観点から考察を深めることをとおして、地域の縄文文化、その特性をより一層理解して発信していく起爆剤としたいという強い想いから、この学習会を開始しました。 昨年度は4回開催し、土偶の辞書的な意味や型式を知ることからはじめ、国宝「土偶」についての研究者の論文に幾つか触れながら、土偶に関するフォーラムや展示会に参加してきました。やっと第一歩を踏み出したばかりの学習会ですが、これからも土偶に関して広い視点で考察を継続し、最終的に参加者一人一人が自分なりの土偶論までこの熱い想いを深めていければ、その手助けが出来ればと考えています。

（小林貢氏）

土偶の勉強会の様子

熱心に聞き入っていました

（7）土偶作り（２００７縄文の道フォーラム　ワークショップ協力）

平成19年９月８日(土)、「中空土偶」が北海道初の国宝になった事を記念し、NPO法人函館市埋蔵文化財事業団主催による、土偶をテーマにした講演や土偶づくりの体験をとおして、縄文文化への理解を深めることを目的に行われました。当クラブはワークショップで行われた土偶作りの指導として協力しました。１時間30分という短い時間での土偶作りでしたが参加者はユニークな土偶や微笑ましい形の土偶、個性あふれる土偶が出来上がり、この体験をとおして、縄文人の技術の高さや精神の豊かさを感じたのではないでしょうか。

ナイスバディ

難しいわね

勾玉・アンギン・絵葉書販売

４．会員からの投稿

（1）中空土偶「カックウ」―　着衣について

中空土偶を見ていると、考え込んでしまうことが多々見つかります。人を模したのか、神の姿として作ったのか。男か女か。何処で作られたのか。誰が作ったのか。散逸して見つからない頭髪と両手は、どんな形をしていたのだろうか。そして最大の疑問は何の為につくり、使われたのか。大きなテーマはまず専門家の解釈を伺うことにして、今回はカックウが身にまとっている衣服について少し考えてみました。私は、カックウは女性像と考ます。そして体全面を覆っている文様を入れ墨という人もいるようですが、これは着衣に描かれた模様であろうと思っています。着衣に描かれたということが大事です。どんな着衣だったのでしょうか。上半身は腰まで来る体にぴったりした前向きのブラウスです。お腹の中央を走る線は紐で括った縫い目です。下半身は足にフィットしたズボンということになります。古代日本人が貫頭依を着ていたという概念は、魏志倭人伝に由来すると思いますが、あれは身分制度が確立し人口も増えた、弥生時代暖地九州の一般人の風俗です。縄文人が貫頭衣を着ていたとは限りません。縄文後期は寒冷な時代に向かっています。北海道の縄文人が貫頭衣のようなユルユルの衣服を日常使用していたとは考えにくい気がします。ズボンという服装も非常に合理的なものです。縄文人の活動の場は森と海でした。森に一歩はいれば、そこはうるさい吸血虫がうようよしている世界です。蚊、ブユ、蚤、虻、山蛭、山ダニ、これらから体を守るためには、体に密着した目の細かい布で作られた着衣が必要です。特に、地蚤やブユは大量に発生します。私自身の経験で、一歩歩くたびに数十匹の蚤が素足に飛びついてきたことがあります。これらの害虫から身を守るには、足首まで包み込む衣服は必需品でした。さらに空想をふくらませれば、衣服は集落全員の共有財産だったのかもしれません。体にフィットする衣服を、分け合って着るシステムがあったとしても不思議ではない気がします。空想で発言できるのは素人の特権です。皆さんも色々空想してみませんか。

（横堀　楠生）

（2）中空土偶に思いを寄せて

札幌に移住してなかなか伺えませんが、こちらでも歴史・考古学に興味を持ちながらノンビリ過ごしています。中空土偶の国宝指定は、「自分の娘が大きな賞」を受けたような嬉しい気持ちになりました。いつかまた訪ねますので、南茅部の遺跡発掘のニュースを引き続きお送りください。会の益々の発展をお祈りしています。　（吉田　端志）

復元整備中の住居

ドングリの木

（3）雑感

早いもので当クラブに入会して間もなく５年、回数はともかく種々の活動に参加させていただいている。ここらでこの活動をありのままに振り返り、自らの次のステップにつなげたい。そもそも入会のきっかけは公民館で行われた土器づくり大会に参加しその際会場に「北の縄文ＣＬＵＢ」入会のコーナーで申込書をもらって帰ったのが始まりである。特別考古学や縄文文化の真髄を研究したいと思ったわけではなく、数千年前に思いをはせ、自然とかかわることを通して、新しい出会いや発見に好奇心を持って入会した。さて、活動している現場をのぞいてみよう。

コモツチ作り、アンギン編み、勾玉づくりなどは毎年の行事でマンネリ化した活動に見えるがこれはこれで結構面白い。アンギン編みでは材料に市販の糸を使うときもあれば、地元で採取されたアカソを使うのもよし、また時にはススキを使い、サイズも大小色々、使い道も色々で工夫をすれば楽しみ方も多様である。ある人は手を動かす一方縄文往事を語りながら、またある人は黙々と手を動かしている。作品の出来ばえが気になるのか気持ちが縄文時代に想いを巡らしているのかそれはその人でないとわからない。会員一人一人が自分の思いを持って参加している事に誰もが口を挟むことはしない。作品が完成するとこれを前にして全員でハイチーズと写真撮影。これも縄文の精神のあらわれなのか。「参加する事に意義がある」、どこかで聞いたことがあるこの意味するところが当クラブのエネルギーの原点にもつながるような気がする。 今までの活動の中で圧巻はなんと言っても縄文を実感できる土器づくりと野焼きである。これは防火上の問題等があるらしく現在中断しているのは残念であるがやむを得ない。ところで平成19年に中空土偶の国宝指定を機に、この南茅部地区が大きくクローズアップされ、テレビや新聞などマスコミを賑わし、今後当クラブに課せられる役割も大きくなり、諸団体との交流・協力、さらには行政との係わりなど部外での活動が活発化することが予想される。これはこれで喜ばしいことである反面、一人でも多くの方が参加できる地道な活動もクラブの更なる発展への礎になることを忘れてはならないと思う。（内山　勝之）

5．縄文人に学ぶ『いのちとこころのはたらき』

テレビのスイッチを入れると、毎日のように殺人のニュースが報じられる。子が親を親が子を殺すなどはそれぞれ理由があるのだろうが、なかには若い人が「相手は誰でもよかった」と訳のわからない殺人を引き起こしている。 なんで、こんなになってしまったのだろう。団塊世代より前の私には、少なくとも昭和30年代までは、こんなことはなかった。生活は貧乏だったけれど、みんなで必死に生きていたように思う。これからどうなってしまうのだろう？

幸いにも人間には過去の歴史に学ぶ知恵がある。現在に生きながら、過去に学び、未来を考えることができる。 縄文時代まで遡って考えてみようと思う。そこには「いのちとこころのはたらき」の素朴な姿があるような予感がするからだ。その素朴な姿が今日と明日を生きるちからにならないか。「いのちとこころのはたらき」について感じたり、想いを巡らせたり、考えたり、信じたりすること（「精神」）には、きっと縄文時代から今日まで変わらないものと変わってきたものがあるに違いない。現代日本人の精神には神道（この言葉自体はもともと中国のもの）、道教、仏教、儒教やキリスト教など世界中から入ってきた精神が積み重なり、とても複雑になっている。これらが時代とともに年輪のようになって、私達の精神の歴史を構成している。縄文杉のような大木の年輪の輪を一枚一枚剥がしていくように、精神史を遡ってゆけば縄文の精神にたどり着けるのではなかろうか。大船遺跡に縄文の風を感じて８年が過ぎた。おかげで、ほんの少しだが、年輪剥しが進んだ。それは縄文人は幼な児が生まれ育つ姿、草木の種から芽を出し茎となりやがて実を結ぶ姿、火の火きりされ焚火となってゆく姿のうちに、おおいなる「いのちとこころのはたらき」をみて、そのちからに驚き励まされ、喜びを覚えたに違いないこと。手近に「いのちとこころのはたらき」をみた縄文人は土偶にも親愛の関係を深めていったに違いないこと。また、私達は精神と物質を対立させるのを当たり前のようにしているが、縄文人にはこの対立は存在しないこと。縄文人は人間が死ぬとき、肉体から「いのちとこころのはたらき」が分離するとはみないこと。「いのちとこころのはたらき」が生き生きとしていた縄文世界には、自然と人間の、人間と人間の関係に征服と支配はなかったに違いないと思う。（「いのちとこころのはたらき」は、「カミ」、「神」、「霊魂」などの言葉と置き換えてもよい。カミは神よりも古い、より素朴な存在ととらえる。）

会長　桜井　弘之

2008年4月30日　第10号発行
発　行　北の縄文CLUB
連絡先　北海道函館市臼尻町603-1
特定非営利活動法人
函館市埋蔵文化財事業団内
TEL　0138-25-5510
FAX　0138-25-5606